

中  
学  
生  
の  
部

## 最優秀作

内閣総理大臣賞

宮城県名取市立みどり台中学校

三年

鈴木

舜

### 孤立をなくす取り組みを

「父さんはまだ若いし、認知症でもないけれど、念のため眼科に行こう」

僕にはまだ七十歳の元気な祖父がいる。大きな病気もないが、最近視力が低下し車の運転が不安だという。医師をしている父に聞いてみるのが一番と考えたのだろう。二人で話し合っている声が聞こえてきた。

高齢者の運転事故が増加していることは、僕も新聞やニュースを見て知っている。認知症の患者さんは車を運転してはいけないのか、率直な疑問を父に尋ねてみた。

記憶など物事を適切に判断する脳の能力、認知機能と呼ぶらしいが、これらが一定基準以下に低下し、改善する可能性が少ない状態になった時、認知症の診断をすると教えてくれた。車の運転は常に集中力を必要とし、瞬間的に状況判断をしなければならなかったため、認知症が存在すると、安全に運転する事が困難になる場合があるという。その際、医師は運転免許更新の可否について診断書を書く。

交通事故は人の命に関わる。リスクがあるなら、認知症患者の免許証を禁止にするべきではないか。安易な返答をした僕は、高齢者が直面する切実な状況を知ることとなった。

問題は他の交通手段が発達している都市部ではない。子供や孫達が家から離れ、高齢化が進む不便な過疎地域である。例えば八十歳の夫婦が二人で住んでいて、妻は病院通いを欠かせない状態だとしよう。夫は車の運転が可能だが、物忘れの進行は、年齢を重ねる度実感する。免許証もそろそろ返納したい。だが、自分が車を手放したら、妻を病院に送迎できなくなる。それどころか、生活に必要な食材や日用品を買いに行

く事も不可能だ。運転しなくなったその日から、夫婦の生活は破綻してしまう。介護送迎サービスを使うにもかなりのお金がかかり、毎回は使えない。

このように、運転は辞めたいが、生きていく上で簡単に辞められないという患者や家族が、病院にたくさんいるというのだ。事態の深刻さは僕でも十分理解できた。

認知症患者や高齢者が、運転免許を返せばそれで解決するという簡単な話ではない。孤立を深めないように、地域で支える必要がある。当事者だけの責任にしてはいけない。無理をしてまで運転を続ける理由を、皆でもつと真剣に考え行動するべきだと思う。

乗り合いバス「なとりん号」が、僕の街を走っている。主に高齢者が使うのだが、市民であれば安い料金で誰でも利用可能だ。空席が目立つが、より多くの人が積極的に利用すれば、高齢者が利用しやすい時間に合わせて、集中的に運用できる事を運転手さんが教えてくれた。正直、乗るには少し恥ずかしいが、こんな僕にも出来ることがあるのだ。小さなことかもしれないが、その積み重ねが地域と交通安全を支えるのだと思う。

## 優秀作 国務大臣・国家公安委員会委員長賞

徳島県鳴門教育大学附属中学校

一年 八代 蒼太

### 「かも知れない運転」で事故防止

我が家で交通安全について話し合った結果、交通事故が起こる原因の多くは、「だろう運転」と、急いでいる時のあせりの気持ちであるという結論になりました。もちろん、他にもたくさん原因がありますが、「だろう運転」をやめる事と、心に余裕を持った運転を行う事で、事故を大きく減らす事が出来るのではないかという事です。

私の父母は、自動車を毎日運転しており、事故を起こしそうになった経験について質問してみると、父は、「狭い道で、だれも飛び出して来ないだろうと思っ

て運転していると自動車が急に飛び出して来る時があり、ハッとする時がある。」と言っていました。又、母は、「仕事でお客さんと約束があつて、時間に遅れそうになった時に、あせつて運転していると、視野が狭くなつて、普段なら見えている物を見落としそうになる事がある。」という事でした。私は、自転車運転したり、歩いている時が多いですが、私の経験から「あの車は止まってくれるだろう。」と思つている時に止まらなかつた時や、時間に遅れそうになつた時に、信号の近くでスピードが出すぎている事など、後で思うと、危なかつたなと思う事が時々あります。

このような、「飛び出して来ないだろう。」「止まってくれよう。」という運転が、「だろう運転」と呼ばれている事を、今回初めて知りました。だろう運転は、自分の都合での勝手な思い込みであり、周りの事を考えていない運転であると感じました。これに対して、「あのわき道から飛び出して来るかも知れない。」「前の車が急ブレーキをかけるかも知れない。」と考え、て運転する事を、「かも知れない運転」と言う事も学びました。この「かも知れない運転」をいつも行う事

が、交通事故を防ぐ上で、非常に重要であると感じました。

もちろん、交通事故の発生原因は他にもたくさんあります。車の故障によるものや、わき見運転、スマホを見ながらの運転や信号無視によるものなど多くがあげられます。「かも知れない運転」と心に余裕を持つ事が全ての交通事故を無くす事になるとは言えないかも知れません。しかし、心に余裕を持つて、「かも知れない運転」をみんなが行う事で、多くの交通事故が減らせる事は間違いないと思います。

今回、我が家で決めた事は、「予定より早く出発し、心に余裕を持った運転をする事。」と「かも知れない運転」を実行する事です。それからは私も、曲がり角が来ると、「あの角から、自動車が来るかも知れない。」と考え、いつでも止まれるスピードで走る事を心がけています。

## 歩行者と運転手

私は、車を運転しない。しかも、「歩行者優先」という言葉は、よく耳にするし、よく見る。

先日私は、家族で、とあるショッピングモールに出かけた。私が何も考えずに道を歩いていると、車とぶつかりそうになった。私はなにげなく、「歩行者優先なのに。」と言うと、父から、「確かにそうだけど、善大は悪くないのか。」と言われてしまった。ふに落ちなかった。

帰宅し、私は父に、「歩行者優先ではないのか。」と尋ねた。すると父は、運転手の立場から話をしてくれた。父は運転手をしている時に、子どもや、自転車にとび出されたことが何度もあるらしい。その時は気を付けていたため事故にはならなかったが、事故を目撃した事があるそうだ。自転車赤信号で飛び

出してきた事が原因だった。「たしかに、過失はあるし、責任も車の方が大きい。それでも、善大は車の方が悪いと思うか。」と聞かれた。その時私は、歩行者の方が悪いと思った。考えてみると、事の大小は違えど、自転車と同じような行動を私もしていたのかもしれないと思った。それと同時に、交通事故がどのくらい起きているのか気になった。七月三十日現在、三千八百二十五件起きており、死者二十八人、負傷者四千七百五十六人（宮城県警HPより）いることが分かった。今年はまだ約七カ月しか経っていないのに、とてもたくさん事故が起きていて、とても驚いた。この事故のうち何割が歩行者の意識で防げたのだろうかと思っていると、父が、「歩行者が考えただけでも事故は減らない。」と見すかされたように言われた。そこで、気付いたのが歩行者と運転する側の双方が「思いやり」を持つて行動する事が大切だということだ。私がすぐにとれる行動は、「信号の無い横断歩道では一時停止をする」、「くかもと考えて行動をする」くらいしか思いつかなかった。普段それだけ何も考えずに歩いているんだと思った。でも、一人一人が小さいこ

とを意識し始めると、交通事故は、少なからず減っていくのではないかと思うことができた。

この小さな「思いやり」は何も交通だけではなく、これからの私の生活の様々な部分で生きてくると思う。今回、このことについて考えることができたことは、夏休み明けの学校生活ですぐに生かせるので、とてもいい経験になったと思う。

今後小さなことでも、私自身の生活に必要なと思うことは、面倒くさがらずに考えて、よりよい中学校生活を送って行きたいと思った。

栃木県小山市立小山第二中学校

三年

澤田

舞

## 交通事故で奪われたもの

二〇二七年十一月、それは突然起こりました。日が落ち真つ暗になった夕方五時、部活動が終わり自転車

で帰宅途中のことでした。赤信号で止まっていた交差点が青信号になり渡り始めたそのときです。猛スピードで左折してきた大型のトレーラーに衝突されました。その瞬間、私は道路の左側に飛ばされました。

私は、中学校入学前に母からあることを聞かされていました。

「ひいおばあちゃんは自転車で交差点を横断中、Uターンをしようとした前方不注意の自動車に衝突され、高く飛んでしまい頭を強く打って即死だったの。もし自転車から降りて押して渡っていれば高く飛ばさずに助かったかもしれない。交差点では慌てずに自転車を降りて押して渡りなさい。」

という話でした。このことは私の胸に深く刻みこまれました。毎日の自転車通学に恐怖を覚え、交差点では自転車を降りて、青になっても左折してくる車がないか右後方を振り向き確認してから自転車を押して渡っていました。慎重すぎると思われるその行動が私の命を救ったのです。警察の方には、

「あんなに車高の高い大型トレーラーに衝突され、全身打撲の怪我で済んだのは奇跡ですよ。自転車を降

りて押ししていたから命が助かったんですね。」

と言われました。曾祖母の死、そして母の言葉が無駄にはならなかったのです。幸いにも、全身の怪我で済み、車いすや松葉づえを使って家族にサポートをしてもらい、リハビリ治療をすることになりました。

しかし、体の痛みよりもっと計りしれない辛い恐怖が私を襲いました。事故のときの真つ暗な光景、大型トレーラーが自分にぶつかってくる瞬間の映像、音、感覚、運転手の顔、私に言った信じられない反省もない言葉、一つひとつが鮮明に頭の中にフラッシュバックし、地獄のような時間が毎日続くのです。病院で、PTSD（心的外傷後ストレス障害）と診断されました。PTSDとは、天災、交通事故など、突然の不幸な出来事によって死の恐怖を体験し、強い精神的衝撃を受けることが原因で心身に支障をきたし、生活に様々な影響を及ぼす後遺症のことです。フラッシュバックの辛さで、私は普通の学校生活が困難になってしまいました。一瞬の交通事故で、たくさんものを奪われたのです。

私たち家族のような、事故による犠牲者をこれ以上

増やさないために、今、もう一度、家族と話し合いをしました。一人ひとりが交通事故に対する意識を強く持ち、交通ルールを遵守すべきだということ、その上でお互いに思いやりをもって交通事故防止に取り組んでいくことが何よりも大切だということを考えました。そして運転手の皆さん、十分すぎるほど注意力を張り巡らせて、安全確認の徹底をお願いします。ほんのわずかの気の緩みや甘い判断が人の人生を大きく狂わせてしまうことを忘れないでください。

これから私は、この事故で傷ついた心に向き合うことを恐れず、奇跡的に助かった大切な命を家族とともに精一杯力強く生きていきます。

## 優秀作

文部科学大臣賞

岡山県総社市立総社西中学校

三年

片山 かたやま

伶 れい

### 反射材の大切さ

「その格好で走っていくなら、反射タスキつけてい  
けよ。」

夜、走りに行く前に私は父に呼び止められた。私の  
その時の格好は黒のTシャツに紺色の体操ズボン。  
確かに目立つ格好ではなく、危ない。私は心の中で「反  
射タスキっておばさんがつけてるイメージでなんか嫌  
なんだよなあ。」と思いつつ、反射タスキを探してい  
た。いつか学校で配られたような反射タスキが見つか  
り、それをつけて走ることにした。

私は走りながら反射タスキの大切さについて考え

た。反射タスキをつけることで遠くからでも存在が分  
かるということは知っていたが、実際のどのくらいの効  
果があるのか調べてみようと思った。

家に帰り、私はインターネットで反射材の効果を調  
べた。ヘッドライトをつけて、夜間に走行中の車から  
歩行者が見える距離の図があった。歩行者が黒っぽい  
服装だと、車に乗っている人が気づくのは約二十六  
メートル先から。明るい服装だと約三十八メートル。  
反射材をつけていれば約五十七メートル。反射材の面  
積が広ければ百メートル先からでも見えるほど、反射  
材にはかなり効果があることが分かった。もっと知  
りたいと思い調べていくと恐ろしいことに気づいた。  
時速六十キロメートルで走っている車の停止距離は  
四十四メートル。つまり、黒っぽい服や明るい服、色  
に関係なく、反射材を着用しなければ車にひかれてし  
まう可能性が高いのだ。

インターネットから学んだことを父に話すと、父も  
知らなかった事が多かつたらしく驚いた様子だった。  
「本当に反射材をつけんと見えんの？」  
と私が聞くと、



「うん、見えんな。夜細い道をゆつくり通つとつたら、こんな近くに人がおつたんか！ つてびつくりすることがあるよ。じゃけん反射材はつけて欲しいなあ。」と、父は話してくれた。父と話して私は、反射タスキをイメージで嫌っていた自分がばかだと思った。反射タスキは車に乗っている人と自分を守ることでできる大切な道具だったのだ。

今、思い返せば、反射タスキや自転車の反射板を配られたり、保健体育で交通事故の原因を学んだり交通安全について考えられる機会はたくさんあった。しかし、自主的に交通安全について考えたのは今回が初めてで恥ずかしいと感じた。

この出来事を通して私は、自分の命を守るためにできる事はたくさんあるのに、していないことに気づいた。これから自分でできることをひとつひとつしていかうと思う。今日から私は反射タスキを堂々と肩から下げて走るつもりだ。

## 佳作

警察庁交通局長賞

愛知県一宮市立大和中学校

一年

長沼 ながぬま

栞菜 かんな

## 命を守る 安全ベルト

私が小学校低学年のころ、その日は夏休みで家族で川遊びに行った帰り道、事故は起こりました。連日、お父さんは私や妹を楽しませるためにいろいろなところへ連れていつてくれています。その日もいつものようにお父さんが運転していました。午前中からずつと遊んでいたの、家族全員が疲れていました。私と妹は、後部座席でディーブイディーを覗いていました。赤信号で止まったとき、お父さんは少し寝てしまいました。青になったのを助手席に乗っていたお母さんが知らせ、お母さんは不安そうにしていました。車が発

進した後、お母さんの「危ないっ」という声と同時に中央分離帯にぶつかりました。その衝撃でシートベルトをしていなかった私と妹は前の座席にぶつかり、そのまま座席の足元に落ちました。お母さんはシートベルトをしていただけで、シートベルトで首をしめつけられ、跡が残っていました。お父さんはうでや足に多少のかすり傷を負いました。この事故は単独事故で、だれも大きなけがをすることがなかったのでよかったです。

私は、事故の原因について振り返ってみると、お父さんの疲労が原因だと思いました。もし、一度休けいをとってから運転をしたり、何日も続けて遊ばず、一日体を休めて体調を整えてから遊んでいたら、事故は起きなかったのかもしれない。

私は、シートベルトの非着用危険性について調べました。シートベルトの着用率は、運転席は約九十七・七パーセント、助手席では約九十三・二パーセントと高いのですが、後部座席での着用率は約三十三・二パーセントとすごく低い結果が出ていました。また、シートベルトの非着用時の死亡率は着用時

に比べて約三・五一倍<sup>\*</sup>も高くなると知りました。後部座席でシートベルト非着用で乗車した場合、一瞬で自分の体重の約三十倍の衝撃がかかります。車が時速四十キロメートルで走行中、壁などに衝突したときの後部座席の人が受ける衝撃はビルの三階から落下したときの衝撃とほぼ同じになります。このとき、前へ押し出されます。また、座っている場所によっては、衝突時に座席などの障害物に当たらず、そのままフロントガラスを突き破り、車外に放出される危険性があり、身体が強くもどされるときに後方の窓を突き破り、車外に放り出される危険性があります。体重の軽い子どもほど飛び出す危険性が高くなります。

私と妹は後部座席でシートベルトをしていなかったけど、けがをしなかったことが不幸中の幸いだと思いました。

私は、後部座席に乗るときに「近い距離だから」「めんどくさいから」「いつも着用していないから」など思ってしまう、着用しないときがありました。これからは、どんな時でもシートベルトを着用したいです。

\*後部座席の場合

## その一言で救われる

「あつもう五時だ。」

僕は、五時三十五分の電車に乗るために、急いで服を着替え、全力で駅に向かって自転車をこぎました。赤信号。大きな交差点で僕は止まりました。信号が青に変わった瞬間、僕は自転車をこぎました。「危ない。」僕の後ろからおばあちゃんの声が聞こえてきました。僕はとつさに急ブレーキをかけました。僕の前を大型トラックが通り過ぎました。僕はおばあちゃんに「ありがとう。」と言った後、自転車をこぎ再び駅に向かいました。そのとき、自転車をこぎながら聞こえてくる心臓の高鳴る音が今でも忘れられません。僕はあの「危ない。」という言葉がなかったら今元気にサッカーが出来ていないかもしれません。もしかしたらこの世にいなかったかもしれません。あの一言に僕は本当に

感謝しています。

僕は家に帰ってその日の出来事を家族に伝え、次の夜に交通安全について家族会議が始まりました。僕は昨日の出来事の反省点として「交差点で赤信号のため止まっていたとき、青信号に変わっても、すぐに飛び出さずに左右を見て、車が止まっているのを確認してから渡ること。」と伝えました。兄は僕の話聞いて、「早め早めの行動をして時間に余裕があれば、信号が青に変わっても急がずに渡れたのではないの。」とアドバイスをくれました。妹は「登下校中の横断歩道のない道路を渡るときに前の人が渡ったからといって自分も渡るのではなく、左右を自分の目で確認してから渡る。」と言いました。お父さんは「夜、お酒を飲んだ後、歩きスマホをしていて近所の用水に落ちた経験から歩きスマホをやめる。」と言いました。お母さんは「危ないと言ってくれたおばあちゃんは命の恩人だね。みんなが安全に登下校できるのはいつも見守ってくれている交通安全パトロール隊の方々や交差点の安全確認をしてくれている旗当番の人達のおかげだよ。」と言いました。

今回の出来事や家族会議を経験して、僕は自転車に

乗るとき安全を意識するようになりました。すると今

まで意識しなかったことに気付くようになりました。

例えば歩道を自転車ですべて走っている人が多いこと、自転車で右側通行をしている人が多いこと、スマホをさわりながら自転車を運転している人が多いこと、このようないかにもしていても交通事故がおきる可能性は少ないかもしれません。しかし一回の交通事故で命が失われてしまうかもしれません。決められたルールをきっちり守ることが交通安全の第一歩だと思います。

あのおばあちゃん「危ない」という一言で命を救われ、交通安全に対する意識も高くなりました。これから年齢を重ねるにつれて自転車の行動範囲が広がります。また大人になれば自動車にも乗ることがあります。今回の経験を忘れずに一生無事故で過ごしたいと思えました。

徳島県鳴門教育大学附属中学校

一年 青木 陽幸  
あおき はるゆき

## 変化していく交通安全

僕の家族は、両親と僕と二人の弟、そして隣に住む祖父母達と猫の合計八人と三匹で暮らしています。祖父はいつも家の前の畑で野菜を作ったり庭で果物を育てたりしています。祖母は花を育てるのが趣味で、僕達三兄弟は家の前の空き地でキャッチボールをしたり走り回って遊んでいました。その様子を見ているかのように猫達がそばで寝転んでいたりとても良い環境で暮らせていました。

ところが、最近家の近所にマンションが建設されることになり、工事が始まりました。そして、近くの畑があった場所も高層マンションが建つ予定なのです。以前の近所の様子はというと、住宅地なので多少車の数が多いですが僕の家の前は空き地や田畑があり大通りまでは誰が通っているか一目でわかるほど見わたせ

ていました。でも今現在は工事のため白く高いへいが立ちならんでいます。僕の家から見る近所の景色はがらりと変わってしまいました。細い通りに大型車両が通るため渋滞になることもよくあります。歩く時は僕の家は通りを曲つたところにあるのでへいがあるや車や自転車 coming 来るかよくわからず一歩で驚く時があります。工事の人達は子供達の登校時間と重ならないように、時間をずらして工事してくれています。へいがないわけではなく先が見わたせずこわいと感じるのはかわりません。工事が始まると決まった時に家族で話をしました。父は、「もともと住宅が多い地域だから子供達もたくさん通るし事故が起きないか心配だ。」と言っていました。母は、「あなたが小学校の時は大通りまで歩いていく姿を、家の二階から見送れたけど弟達は家を出てから数メートルで姿が見えなくなってしまう。さみしいなと思うのと大丈夫かなという不安な気持ちがある。」と言っていました。それに祖父の畑はへいの真横にあるので日があたらず、猫達と僕らが大好きだった場所はコンクリートに変わり近づかなくなりました。きつと、どこであつても同じ様

な事はあるし特別な事ではないけれど、急激に変化していく環境に慣れるのには時間がかかります。しかし、この変化のおかげで家族と交通安全について改めて話すよい機会となりました。例えば、高いへいや見通しの悪い場所では一度立ち止まって確認してから通るということや、遠回りになったとしても安全なあまり車の通らない道を歩くということ。あせって走らずにすむように今までより早めの時間行動をすることなど、たくさんの方の方法を皆で話し合いました。安全な生活は周りの環境によつて変化していくこともあるがその時の状況によつて、僕達の考え方も変化しながら対応していくことが大事だと思いました。皆が安心して暮らしていくためにも必要な事だと思います。

## いのち

私には大好きな人がいた。それはひいおばあちゃん  
の君子さん。本当は大好きな人がいたじゃなくてい  
るって現在進行形で言いたかったけど、過去形にせざ  
るを得ない。そう、大好きな家族を亡くしたんだ。そ  
れは二ヶ月くらい前のこと。

ばあちゃんが亡くなった原因は、病死でもない。老  
衰でもない。交通事故だった。ばあちゃんは七十九歳  
でまだ若かったしいつも車を運転していた。心臓とか  
脳に病気は持っていたけどとも元気な人だった。あ  
の日も車を運転していたけどとて事故に遭った。電柱にぶつ  
かってしまったとかなんとか。色んな話を聞いている  
と、その時はエアバッグが出たらしいけどばあちゃん  
はシートベルトしていなかった。確かによく考え  
るとばあちゃんはいつもシートベルトするのを忘れて

いた。一緒に乗ってる人に、「ばあちゃん、ちゃんとシー  
トベルトして。」そう言われてからやるのがしよつ  
ちゅうだった。事故の日は一人で乗ってたからまた忘  
れてしまっていたんだらうか。即死ではなかったけど  
心肺停止状態で二時間。心臓破裂してしまうほどの事  
故だった。もしかしたらシートベルトをしていれば、  
少しでも助かる希望がみえていたかもってばあちゃん  
のことを考えるたび思う。シートベルトの大切さを改  
めて知った。それも私が一番大好きだった家族から  
だ。こんな教わり方は嫌だったけどばあちゃんのおか  
げで知ることができた。今では、前よりもシートベル  
トの着用を心がけるようになった。自分だけではなく  
他の人にも言うようになった。それもあんな思いは二  
度としたくないから。いつどこで事故が起きるかは分  
からない。起きてからじゃ遅い。例えば事故が起きたと  
しても、「いのち」だけは守りたい。医者にだつて手  
に負えないことくらいある。それなら最初から自分の  
命を守るためにできることをしておくことが大事だと思  
う。自動車だけじゃない。学生なら自転車の可能性  
だつて高い。ヘルメット、たすきの着用は命を守るた

めに必要なはず。自動車だつて自転車だつて交通事故  
が起こるなら私達のまわりは危険なことであふれてい  
る。実際、私はこの四月に自転車で怖い思いをしてい  
る。自転車の規則を守つて乗つていた。左折した時に  
右通行できた自転車と少し衝突をしてしまった。これ  
は命に関わる程のものではなかったが私は相手の人と  
のトラブルで恐怖症が残つた。ばあちゃんの事故と私  
の事故は全然違う。命に関わる関わらない、でも少な  
くともどつちも苦しい思いをしてるのは確か。私は今  
も苦しいし怖い思いをしてるから。私は事故に遭つた  
時ルールを守つていたのに後悔している。あの時よく  
左を確認してから曲つていればこんな怖い思いを抱え  
たままになつていなかったんだろうなと。だからもう  
そんな思いをしないように交通事故に遭わないように  
気をつけている。ばあちゃんも後悔してるのかな。ば  
あちゃんの後悔、私の後悔。

これからの人生、交通事故で嫌な思いはしたくない。  
誰だつてそう思つてゐるはずだ。なら、たつた一つの  
“いのち”は精一杯守らなきゃ。たつた一つしかない  
んだから。失つたものは取り戻せないんだ。だから、

何よりもどんなものよりも守らなきゃいけないのは、  
“いのち”なんだと私は思う。

栃木県栃木市立都賀中学校

二年 小森こもり 稀乃香のりか

## 自転車のルール

ある日、家族で夕食を食べていた時のことです。母  
が、車の免許更新でのことを話し始めました。「今日  
は、免許の更新で講習を受けてきたよ。そこで自転車  
に関する話も聞いてきたよ。」と言いました。私は中  
学生になり、家から学校までの距離を毎日自転車で登  
下校しています。だから、これは他人事ではないと思  
い、話を聞き始めました。母が講習で聞いてきた話は、  
小学生が乗つた自転車と散歩中の女性が衝突する事故  
が発生したこと。女性は事故の影響で寝たきりになり、  
裁判所は小学生の両親に約九千五百万円の賠償金を払

うように命じたという内容の話でした。自動車と違って免許のいらぬ自転車は、子供にとつても重要な移動手段です。しかし、もし事故を起こしてしまえば、大人と同等の責任が生じてしまうことです。さらに、高額な賠償金を請求された場合、子供には支払い能力がないため、親が賠償するケースが多いということを知り、とても大変なことだと思いました。時には自己破産に至る例も少なくなく、家族全員が辛い思いをするということでした。

自転車は、誰でも気軽に乗れるものです。だからこそ、加害者になる可能性もあるのです。その危険性を意識して利用している人は少数派で、まさか自分が加害者になるとは思わずに乗っている人がほとんどだと思います。特に中高生は、集団で自転車を運転していることも多く、いつ自転車事故が起きても不思議ではない状態です。

そこで、事故に遭わない、起こさない、加害者にならないためにはどうしたらよいか、母と妹と話し合いました。母が、自転車安全利用五則を印刷してくれました。ヘルメットの着用はもちろん、二人乗り、並進

の禁止、光るタスキの着用、交差点等での一時停止について再確認しました。そして、何より時間と心の余裕をもって運転することを三人で約束しました。

エコロジー、さらに健康的な自転車への人気が昨今高まっています。その反面で道路整備といった環境面や交通ルールの徹底という意識の面で、不十分で反省すべき部分があるのも事実です。誰でも乗れる自転車は、れっきとした車両です。だからこそ、交通ルールをしつかり守り、安全運転に努めていきたいと思えます。



## 安全への第一歩を

私には、歳が五つ離れた兄がいます。その兄が先日、車の運転免許を取りました。兄の運転する車に乗ってみて感じたことや、運転していた兄の言葉から考えたことなどが二つありました。

一つ目は、車を運転している人全員が初心に帰って運転したらいいのということです。兄は、運転中、よく後ろをふり返ったりバックミラーを見たりします。また、制限速度をきちんと守り、ウインカーもきちんと出します。車を運転する上で、これらをするのは当たり前ですが、実際はしていない人も多くいます。そういう人たちが、よく交通事故に巻き込まれたり、関係のない人まで事故に巻き込んだりしてしまうと思うのです。

初めはみんな、教習所で教えてもらったとおりの正

しい運転をしているはずですが、正しい運転をすればきつと交通事故は減ります。だから、運転をしている人全員が初めの頃を思い出して、その頃の気持ちで運転することを心がけられたらいいなと思いました。

二つ目は、もつと周りに気をつけて自転車に乗るということです。いつだったか兄が、「自転車つて怖いわー。急に飛び出してくるし、夜とかライトつけてなかったらおるのが全然分からんし。」

と言っていました。そのとき、自転車に乗っている側からしたらそんなに気にしていなくても、車を運転している側からはそんなふうに感じていたんだなと思いました。それから私は、前以上に周りに気をつけて自転車に乗るようになりました。道路を渡るときは必ず止まって左右を確認したり、駐車場から出てくる車には注意したりしています。また、部活で多人数で自転車移動するときは、

「車来てるから端によつてー。」

と声かけもするようになりました。私だけではなく、多くの人たちがこのようにして自転車に乗ると、車を運転している人たちも少しは安心して運転できると思

います。それが、交通安全にもつながるなと考えました。このようなことから、交通事故を減らして安全に生活するためには、「自分は大丈夫。関係ない」と思わないことが大切だと考えました。自分は事故しないとか、交通事故に遭遇する確率なんて低いと考えるのはよくないと思います。みんなが交通事故を身近に感じ、自分ができる最大限の対策をしていくべきです。私も、もう何年かしたら免許を取るとしています。自分が車を運転するときには、交通ルールを守って安全を一番に考えようと思っています。

### 山形県米沢市立第一中学校

三年 山木 穂

### 「いっころ」の若葉マーク

先日、家族みんなで買い物に車で出かけた時、自宅近くの一方通行の道路を逆走してくる一台の車を見か

けました。父は車の窓を開けて、「この道路は一方通行だよ。危ないよ。」

と声をかけましたが、その車の中にいた六十代くらいの夫婦は止まらずに、そのまま走り去って行きました。その道路には、他の車や自転車、歩行者もいましたが、みんな驚いているようでした。初めて車の逆走を見た私も、とても驚きました。父の話によると、この道は大きな道路の側道になっていて、近くのショッピングセンターから出てくる車が、時々間違えて逆走してくるのだそうです。

その日の夜、家族でこの件について話し合いました。毎日この道を車で通勤している姉の話では、今まで二、三度ほど逆走してくる車を目撃していて、危うく事故になりかけた時もあったとのことでした。姉がこの道を通る際は、特に集中して運転していると聞き、近所にそのような道路がある事に驚きました。私は今まで、自分が交通ルールを守ってさえいれば安全で、事故に遭わないと考えていましたが、この日の逆走を見て、周りを走行している自分以外の車や自転車等の状況を、きちんと把握しておく必要があるのだと感じま

した。

また、姉からは運転についてこんな話も聞きました。

私の姉はまだ運転初心者で、つい先日まで若葉マークを車につけて運転していました。大多数のドライバーは初心者の姉に対して、道を譲ってくれるなど、優しい運転をしてくれるのだそうです。姉はそれがとてもうれしく、ありがたいのだと言っていました。しかし、それとは全く反対の、心ないドライバーの中にはいるのだそうです。

姉がまだ若葉マークを車につけていた時に、後ろを走っていたトラックにびつたりと接近され、ジグザグに走られたり、クラクションを鳴らされたりして、すごく怖い思いをした事もあったと聞きました。おそらく、姉が出していたスピードを遅いと感じたトラックのドライバーが、あおり運転で嫌がらせをしてきたのだと話していました。その話を聞いていた母は、

「そのドライバーも昔は初心者だったはずなのに、初心者に対してあおり運転をするなんてひどいね。」  
と言っていました。また父は、

「あおり運転は事故につながりやすい危険行為だし、

警察も取り締まりに力を入れている重大な違反だよ。」  
と教えてくれました。

そんな姉は先日、私とドライブをしていた時に、若葉マークをつけた車に道を譲ってあげていました。姉にその事を聞くと、

「私もたかさんの先輩ドライバーに優しくしてもらったから、そのお返しを後輩たちに行っているんだよ。」

と笑顔で話してくれました。

私は車の運転という、心が通いづらいものだからこそ、譲り合いや感謝の心を忘れないようにすることが大切だと思います。そして私たち歩行者も、横断歩道で止まってくれたドライバーに感謝の気持ちを伝えるなど、お互いが安全で気持ちの良い関係でいられたらと考えています。

最後に、姉がこんなことを言っていました。

「車の若葉マークは取れたけど、『こころ』の若葉マークはいつまでも持ち続けたいね。」

三年

三好<sup>みよし</sup>

彩心<sup>あやね</sup>

## 免許返納を家族で考える

家に遊びに来た祖父が祖母について愚痴を言った。  
「バアは、あっち行け、こっち行け、次はこっちだ。  
毎日毎日ジイは運転手だよ。」

祖母は昔から免許を持つていない。そのため買い物  
はいつも祖父の運転する車に乗って出かける。私の母  
も時々祖父の運転する車に乗り出かける。車に傷はな  
いか、運転は大丈夫かチェックしているらしい。母は  
ハッキリ言う。

「運転が危なっかしく感じたり、車にぶつけたよう  
な跡があったら今後の運転についてしっかりと話そう  
ね。」

私も時々祖父の運転する車に乗るが、とても安全運  
転だと思う。目は大変良く、制限速度や標識もしっか  
り守る。運転中は音楽やラジオもつけない。

時々、ニュースで高齢者の事故について目にする。  
そのたびに思う。これだけ事故が多いのに、自分の運  
転は大丈夫だと思っていたのか。家族は何も言わな  
かったのか。免許を取得できる年齢が決まっているの  
なら、返納の年齢もあつてはいいのではないだろうか。  
私は祖父が車を運転しなくなったときのことを考えて  
みた。祖母の家の近くには、スーパーや薬局、病院  
などはない。自転車での移動は体力的にも危なっかし  
い。バス停は少し離れた場所にあるが、目的地まで行  
くのバスを使うとなると不便なことが多すぎる。そ  
うなるとタクシー。祖母はきつと料金のことなどを気  
にして利用しないだろう。それでは新しいサービスを  
使つてはどうだろうか。今の時代、買い物はインター  
ネットで簡単にすませることができ。また病院に  
よつては、これから自宅に居ながら医師の診察を受け  
ることができるサービスも出てくるらしい。私からす  
ると、どれもとても便利で嬉しいサービスだと思つた。  
しかし、祖母からすると、あまり魅力的ではないら  
しい。それらのサービスを利用するには、スマホやパ  
ソコンが必要になり、覚える必要もある。新しいこと

を始めるのは大変で、少し抵抗があるらしい。自分で商品を見て買うことは、楽しみの一つでもあるそうだ。また、病院もある意味、憩いの場だったりもするらしい。そんなことを聞き、考えると、やはり車はなくてはならないものに感じる。しかし、何かがあつたとき、これらは自分のためのことであつて、言い訳でしかない。

先日、祖父は自動車学校で行われた高齢者ドライバーの運転教室へ行ってきたらしい。テストで百点はとれなかつたものの、合格点をもらえ少し嬉しそうに話をしていた。そして、次の免許の書き換えは行わず、返納するかもしれないと話していた。母はその潔さに少しホツとしたらしい。私は母に、祖父が免許を返納した後のことをどう考えているのか、聞いてみた。

「近くに住んでいるんだから、一緒に買い物へ行ったり、病院にも乗せていったりするよ。あなたも周りをよく見て歩いてね。」  
と言った。

—人それぞれの考え方や過ごしている環境の違いもあると思う。多くの人が視野を広げ、お互いのことを考

え、事故がない安全な世の中になることを望む。そして、高齢者の世界が狭くならず、過ごせる環境が整い、広がってほしいと思う。

